

ソ連の動向重要日誌

1 月

- 2日 ▶ザバイカル鉄道新たに400km 電化。
- 4日 ▶コムソモリスク付近アムール川氷上鉄道（最後の氷上鉄道）——コムソモリスクはいま-30°Cの寒さである。これを利用してして例年より一週間早くアムール川の氷上に臨時鉄道橋を敷いた。
- 5日 ▶ウドカン銅山へ冬季道開通。
- 8日 ▶ブレジネフ書記長、母親の葬儀に出席。
- 10日 ▶ソ連、米ソ通商協定を破棄。
- 15日 ▶宮沢外相訪ソ。
- 16日 ▶バム鉄道建設にウズベクの建設者の協力。
- 19日 ▶日ソ外相会談「共同発表」
- 21日 ▶保健省次官、ブレジネフは軽い呼吸器病と言明。
- 24日 ▶中央統計局、1974年度経済実績発表。
- 28日 ▶全軍イデオロギー活動家会議開催。
- 31日 ▶グロムイコ外相、中東諸国歴訪。
 - ▶ブレジネフ、強硬派の要求を受入れて対外緊張激化方針へ転換か。

2 月

- 1日 ▶西側ビジネスマン、スパイ容疑で逮捕者続出。
- 2日 ▶グロムイコ外相、PLO 議長と会談。
 - ▶ソ連外相、シリアのアサド大統領と会談。
- 3日 ▶ソ連・エジプト外相会談。
- 4日 ▶バイルートの新聞、ブレジネフ手術と報道。
 - ▶トロヤノフスキー大使の対日工作活潑、外務省は黙殺の方針。
 - ▶グロムイコ外相、カイロでブレジネフ病気を肯定。
 - ▶中ソ国境再び険悪化か？ ワルシャワ情報、交戦説を伝える。
 - 5日 ▶ショーロホフの「静かなるドン」は盗作と、反体制歴史家メドベージェフ暴露。
 - ▶駐日ソ連大使、重ねて友好条約提案、外務省拒否。
 - ▶タス通信、中国新憲法を批判、人民の権利と自由侵害と指摘。
 - 7日 ▶ソ連軍事顧問団7000人、アラブ諸国へ配置とイスラエル国防相非難。
 - ▶党員証書き換え完了、約1500万人、人口の9%。

12日 ▶イリイチョフ・ソ連国境交渉代表団長、北京へ帰任。

- 13日 ▶ブレジネフ書記長、訪ソの英首相と会談。
 - ▶ブレジネフ、三木首相へ返書。
- 16日 ▶ジュネーブで米ソ外相会談。
- 17日 ▶米ソ外相会談続行。
 - ▶米ソ共同声明ワシントンで発表。
 - ▶英ソ首脳会談終了、ウイルソン英首相帰国。
- 18日 ▶ブレジネフ、ハンガリー党大会で演説。
- 21日 ▶ブレジネフ、ザバイカル自動車化狙撃連隊激励
- 23日 ▶ソ連の武器、インド国内で生産の協定成立か？
 - ▶東欧向け原油輸出価格、来年初頭2倍以上の値上げ、トン当たり21.5ドルから49.5ドルへ。
- 24日 ▶ユダヤ人6名、モスクワで出国の自由求めてデモ、ただちに逮捕さる。
 - ▶ソ連、インド国防相会談。
- 25日 ▶グレチコ国防相、ガンジー首相と会談。
- 26日 ▶英国ヘウラン供給の契約調印、80年以降約1000トン。
 - ▶バム鉄道建設者へ慰問袋。

27日 ▶バイカル＝アムール鉄道建設ニュース——建設中のバイカル＝アムール鉄道の西地区の要点のひとつであるマギストラリヌイ団地に最初の書店が開かれた。

- ▶印パ関係再び緊張、その裏に米ソの支援。
- ▶グレチコ国防相、インド訪問終了帰国。
- ▶日本沿岸でのソ連の乱獲続けば次の措置考えると外相表明。

3 月

- 1日 ▶アルマ・アタ飛行機修理工場——アルマ・アタ飛行機修理工場では、労働生産性を1974年度に比べて5%向上することを予定。
- 2日 ▶キルギス共和国最初の50万Vの高圧送電線操業。
- 3日 ▶バム鉄道建設へノボシビルスク鉄道運輸大学から宣伝工作隊。
 - ▶ソ連漁船団の中に掃海艇混る。
- 4日 ▶ソ連大型漁船の意図的な無謀操業、海洋法会議に備えての実績づくりか。

8日 ▶バム鉄道建設へソチから飛行機で花。

10日 ▶チュメニのサモトロール油田ニュース——サモトロール油田は開発以来1億5000万トンの原油を採取した。そのためには6年以上を要した。

11日 ▶水産庁長官、モスクワで漁業相と会談。

12日 ▶バム鉄道建設と将来のベルカキト駅の調査——クズバス・トラストから来たバム鉄道建設調査隊は、厳しい気象のなかで将来のベルカキト駅の調査を行なって帰った。ベルカキト駅は、ユジノヤクーツ炭用とトゥインダ＝バム鉄道とつながり、1年後にヤクートのコクス炭をシベリア幹線上に運びだすものである。

▶日ソ漁業会談開幕。

13日 ▶バム鉄道のタイシェト＝レナ間の複線工事中。

15日 ▶ウスチ・イリム水力発電所建設ニュース——ウスチ・イリム水力発電所の第4番目の発電機の組立てが本日はじまった。

20日 ▶バム鉄道ニュース——バム鉄道沿線の鉱物資源開発がはじまると、100万人を下らない人口が居住して働くことになる。それまでには約200のステーションと待避駅を作り、3000以上の施設、142の大きな鉄橋の建設、2億2000万m³の土木工事、25km以上のトンネルをつくらなければならない。

24日 ▶新造砕氷船《エルマーク》号ウラジボストークに入港——歴史的に有名な《エルマーク》(シベリアを侵略した)の名をとったエルマーク号が司令船となり、《モスクワ》号、《レニングラード》号、《ウラジボストーク》号のような強力な砕氷船とともに北方航路の船舶航行を保障することになった。

29日 ▶トルクメン共和国で巨大な岩塩鉱床発見。

31日 ▶シェレーピン議長、突然訪英——激しい訪英反対運動をまきおこしていたソ連のシェレーピン労組評議会議長(党政治局員)を団長とする労組代表団は31日夕、予定を繰り上げひそかにロンドンのヒースワ空港に着いた。

4月

1日 ▶中東、ジュネーブ平和会議、再会の準備をエジプト米ソに要請。

▶シベリアに3大紙パルプ工場、日本が設備と借款。

2日 ▶訪英のシェレーピン氏、国民の前に姿見せず帰国。

▶ソ連、バングラ経済協定調印。

3日 ▶日ソ、第二次極東森林資源開発取決めに調印。

▶日ソ・サケマス交渉会議西カムチャツカの底引き網漁禁漁を、ソ連提案。

▶カニ、ツブ交渉、ソ連側当初規制案譲らず。

4日 ▶米財務長官、ソ連など4カ国を訪問。

▶ソ連、日中友好条約交渉について日本に警告。

▶ウクライナからチタ州南部へ移民。

5日 ▶ブレジネフ書記長、エジプトに親書。

6日 ▶ユジノ・サハリンスクの《土曜労働》に7万人参加。

7日 ▶ソ連のソユーズ失敗で、NASA緊急会議。

▶蔣総統死去に冷静なソ連。

▶ソ連の金売却、昨年は7億5000万ドルとCIA推計。

8日 ▶国を挙げてバム鉄道を建設していると強調——プラウダ紙8日付第一面社説。

▶バイカル＝アムール鉄道東部地区にウクライナからの建設者作業中。

9日 ▶伸びるソ連の対西側貿易——9日のプラウダに載ったパトチェフ外国貿易相の西側との貿易に関する展望談によると、ソ連の西側工業国との貿易量は過去4年間に2.7倍に伸び、昨年実績で124億ルーブル、ソ連全外貿易の31%を占めるようになった。

▶日本のサケ・マス漁獲量、ソ連側8万トン台提案。

10日 ▶禁漁水域でソ連強硬、難航する日ソ・カニ交渉。

▶イラン＝ソ連＝西ドイツを結ぶ天然ガスパイプライン協定調印。

11日 ▶政府、対ソ・アンモニア製造プラントで銀行間借款認める。

▶ソ連、イスラエルに特使——イスラエルの日刊紙・ハーレッツが11日報じたところによると、ソ連政府の特使2人が先週秘かにイスラエルを訪問、ラビン首相、アロン外相と会談してジュネーブでの中東和平会議再開について協議したという。

▶バム鉄道建設に8000の青年男女。

12日 ▶ソ連へ茶摘み機など輸出。

15日 ▶ヤクート天然ガス探鉱、米国バンクローン供与でスタート——安西浩日ソ経済委員会天然ガス懇談会委員長は15日、シベリア開発6大プロジェクトのひとつであるヤクート天然ガス探鉱に対し米国がバンクローンを供与するめどがついたとし、これにより懸案の日・米・ソ3国による共同探鉱が実現する見通しになったと語った。

▶米・中・ソ軍拡競争続行——軍事専門家間で権威のある英国のジェーン兵器年鑑の74—75年版が15日発行されたが、米・中・ソ3国の軍拡競争はいっこうに衰える気配はない。同年鑑の編集者の1人 R. T. ブリティー氏は序文の中で、米ソ間の戦略兵器制限交渉は、両国が同協定の網をくぐり抜けて戦略兵器を拡充する技術を高めただけであると指摘、両国が相変らず国の科学技術

の粋を傾けて核武装の質的向上に努めているとしている。最近の傾向としては、小型ないし中型核弾頭とその精度向上化を重視しているという。ソ連は主力ミサイルの新型 ICBM, SS18型, SS19型の配置についてもこれが行なわれているとしている。これら2種のミサイルは8個の多目標弾頭(MIRV)を装備したソ連ミサイルの最新鋭版。一方、米国が開発中の核兵器は、ミサイルXと呼ばれる移動可能大陸間弾道ミサイル。このミサイルは戦略爆撃機からパラシュートで落下。空中でロケットエンジンに点火して攻撃目標に向かう性能を持つ。中国もまた独自の ICBM 開発を進めているが、その明確な実態については何も紹介されていない。最近、中国西部にソ連に対抗するための大規模な位相レーダー基地が建設された事実から、中国が高速コンピューター、集積回路など電子工学の分野で大きな進歩を示していると推測している。

▶サケ、マス漁獲量、日本8万7000トンに決まる。

16日 ▶日ソ・カニ交渉、タラバガニ、西カムチャツカで全面禁漁。

▶シュレーピン政治局員解任——ソ連共産党は16日、党中央委員総会を開き、シュレーピン政治局員を解任すると発表した。党内で反主流派だった同政治局員の解任は、ウクライナ党第一書記兼政治局員だったシュレスト氏の解任に次ぐ大きな措置で、現ブレジネフ政権の強化につながるものとみられている。また同総会は来年2月に第25回党大会を開催することを発表し、党大会にむけて新たなブレジネフ体制の再編成に向かうことになった。タス通信によると、16日の党中央委総会でグロムイコ外相が「国際情勢とソ連の外交政策」と題する演説を行なったあと、人事問題をとりあげ、シュレーピン政治局員を本人の意思に従って解任することに決めたこと述べた。解任の理由については、本人の要請以外何も明らかにされていない。背後に深刻な政争があったとみられている。シュレーピン政治局員は現在56歳で、政治局内部で最も若年の実力者の一人。これまで政変の噂がでるたびに、西側では政権担当の有力候補の一人にあげられてきた。1972年、シュレスト氏がウクライナ民族主義と対米緊張緩和政策不賛成を理由に政治局員から解任されていることから、こんどのシュレーピン解任もブレジネフ路線に対抗する党内有力者を現指導部から排除したことを意味しよう。

▶ブ書記長を全面支持、党中央委総会で決定。

▶ソ連が海軍演習準備。

17日 ▶ソ連人記者が亡命——東京湾海で21日からオープンする第11回東京国際見本市取材のため来日したソ連人記者が、宿泊先のホテルを出てアメリカに政治亡

命を求めてきたことが、17日明らかになった。政治亡命を求めてきたのはソ連、ノーボスチ通信の記者、アナトリー・ダビドフ氏、27歳。

18日 ▶亡命ソ連記者、米国へ。

▶シュレーピン訪英、陰謀説——ソ連のシュレーピン党政治局員の解任について、つい2週間前の同氏の訪問にさいし一部で激しい抗議デモを展開した英国は、ことさら大きな驚きを感じている。英国ではソ連当局の発表にある本人の希望によりという理由をそのまま信ずる向きはほとんどなく、①ソ連国内の権力闘争から脱落した。②シュレーピン氏の訪英当時の騒動が解任のきっかけとなった、などを失脚の真の理由とみるのが大半である。デリーメール紙の報道によると西側のソ連観測筋の間では先の訪英をある種の陰謀とみる見方がある。これによると、シュレーピン氏が英労働組合会議(TUC)の招待で訪英するという報道が初めて流されたとき、ブレジネフ書記長は在ロンドンのルンコフ大使に指令してシュレーピン訪英でどのような反応が英国に起こるか、極秘の報告を求めたという。ルンコフ大使はキャラハン英外相と保守党影の内閣の外相、モードリング氏と2人もこの訪英で反対感情が高まりデモによって英ソ関係に良くない事態が起こるかも知れないという意見を述べたという。こうした内容はすべてクレムリンに送られたが、結局ブレジネフ書記長はシュレーピン氏をロンドンに旅立たせたという。またガーディアン紙はソ連政治局内部の反シュレーピン派が同氏の訪英でソ連の国際関係に厄介な事態を引き起こしたとして、その責任を追及した可能性があるとして述べている。ブレジネフ書記長の態度はシュレーピン失脚を意図したものなのか、また逆の立場からのものだったのかは解らないので今後の情勢の推移をみなければわからない。しかし、結果としてシュレーピン氏が失脚した事実は、クレムリン内で深刻な争いが行なわれたことを証明するものであり、ブレジネフ政権が安定したものと判断するにはまだ早く、今後が注目される。

▶外交面でも現政権路線確認、ソ連党中央委総会。

▶対カンボジア外交でソ連早くも援助決定——ソ連はプノンペン解放で勝利の方向が決定したカンボジア解放勢力に対し、影響力の強化に乗り出した。

19日 ▶インド初の科学衛星、ソ連領内から打ち上げ。

▶ソ連、エジプト外相会議はじまる。

21日 ▶コスイギン首相、カンボジアへの援助を約束。

▶ブレジネフ、エジプト外相と会談。

22日 ▶スースロフ政治局員、平和共存路線を称賛。

▶クラコフ氏、席順上位、書記長本命説を裏づける。

23日 ▶パレスチナ解放軍、ミグ戦闘機を配備。

▶イスラエル撤退すればソ連が安全を保障——グロムイコ・ソ連外相は23日、訪ソ中のハダム・シリア外相の歓迎夕食会で演説し、イスラエルがアラブ占領地域から撤退するなら、ソ連は適当な協定の形でイスラエルの存在と独立を最大限に保障するだろうと述べた。

24日 ▶西シベリアの原油年産1億4700万トン。

▶モスクワ放送日中覇権問題で警告。

25日 ▶重光大使、三木親書をグロムイコに手交。

26日 ▶ソ連の海上演習、タンカー攻撃か？——米国防総省の軍事専門家グループは最近のソ連の大規模な海上軍事演習について26日、ソ連がベルシャ湾から西欧諸国や米国に向うタンカーの攻撃演習を初めて行なったのではないかとの分析結果を明らかにした。

28日 ▶中朝、共同コミュニケ、ソ連批判はさける——14年ぶりに北京往復した金首席の中国訪問は、内外の注目を集めていたが、発表された共同コミュニケをみる限り、朝鮮半島問題に重点が置かれ、ソ連修正主義、社会帝国主義、覇権条項など直接ソ連を刺激する表現は避けた形となった。

30日 ▶ソ連、南ベトナム崩壊後への影響力拡大を図る。

▶北ベトナム、中ソの要請をけり、攻勢の独自性を示す——南ベトナム臨時革命政府と接触のあるバリの信頼できる筋が30日語ったところによると、さる3月北、革命政府軍が大攻勢を開始した直後、政治解決を望む米仏両国から援助要請を受けたソ連と中国は、北ベトナムに最終的な攻略作戦を差し控えるよう働きかけたが北ベトナムがそれに応じなかったという。

▶ベトナム勝利の陰の主役に、ソ連製武器——ベトナム戦争勝利を導いたのはソ連製兵器だった。戦闘機ミサイル、戦車、大砲、レーダー。1965年2月の米軍の北爆開始以来現在までの10年間にソ連の北ベトナムに対する軍事援助は約17億6000万ドルと推定され、解放勢力側の武器の8割はソ連製とみられる。

5月

1日 ▶サダト大統領、ソ連に武器支払い猶予を迫る。

2日 ▶PLOのジュネーブ会議参加をソ連要請。

5日 ▶シンガポール首相、ソ連接近策は危険と警告。

▶中ソ国境会談交渉進展せず。

6日 ▶キプロス内相、訪ソ。

▶中ソなどの貨物船、続々とダナン入港。

▶核軍縮、米ソが責任をと核防条約再検討会議でメキシコが批判。

7日 ▶モスクワ放送、廖承志の反ソ演説に反撃。

▶極東最初の50万ボルト高圧送電線建設。

8日 ▶カンボジア解放軍、ソ連国旗を踏みつける。

9日 ▶対独戦勝30周年を祝い、プ書記長が米大統領に親書。

▶ソ連、平和アピール——ソ連共産党中央委員会最高幹部会、政府は対独戦勝30周年記念日の9日、全世界の国民、政府にあてた平和アピールを発表した。

10日 ▶米商務長官、シベリア共同開発でソ連代表との会談の用意。

11日 ▶欧州共産党会議、東独案にユーゴなどが反発。

▶中国、ソ連の12の覇権主義を社会党「流れの会」に指摘。

▶ソ連、軍事援助の代償にカムラン湾要求か？

▶北ベトナム副首相、スースロフ政治局員と会談。

12日 ▶ソ連首相、リビア訪問。

▶カムチャツカで大噴火。

▶ソ連、借款80億ドルを越える。

▶ソ連、南ベトナムと経済援助協定に調印。

▶対独戦勝30周年で、ソ連艦隊、ボストンへ。

▶シャーシン石油工業相、日ソ協力を強調。

▶レナ川下流航行開始。

13日 ▶モスクワ放送、ソ連がカムラン湾に基地要求はデマと報道。

▶プラウダ、タイ支局開設へ。

▶池田創価学会会長、ソ連首脳と会見か。

14日 ▶サダト大統領、対ソ債務返済で米に援助要請。

▶ワルシャワ条約機構、自動的に10年延長。

▶ブランド前西ドイツ首相、訪ソ延期。

▶ムシャーチン・タス通信社長、米ソ関係安定を強調。

▶在京ソ連大使館筋、社会党の中国との共同声明を厳しく批判。

▶ソ連、覇権問題で日本を巻き込むなど、厳しく中国を非難。

15日 ▶シベリア開発で新提案、三菱グループを打診。

▶モスクワ放送、成田委員長を名指しで非難。

16日 ▶ソ連役人、西側ビジネスマンからワイロ受け死刑の判決。

▶ソ連大使、両院議長を訪問。

▶日ソ近海漁業協定の実質合意が成立。

17日 ▶ソ連・チュニジア共同コミュニケ。

▶中仏、ソ連の脅威で意見対立。

▶オビ川、トミ川航行開始。

18日 ▶ワシントンポスト紙、ソ連・中東和平会議準備工作に失敗と報ず。

19日 ▶社会党、プラウダの成田批判に対し、当分は沈黙の方針。

▶ケルディシ科学アカデミー総裁辞任。

20日 ▶コメコンのエネルギー政策の新方向——ソ連のエネルギー供給量が限界に達し、新たなエネルギー資源の確保に向って、コメコンは具体的な計画に着手つつある。

▶ブレジネフ書記長、病気か？

▶ソ連のタンカー3隻、サイゴン入港。

21日 ▶ソ連はキ長官の工作に同意とイスラエル観測。

22日 ▶ショーロホフ氏にレーニン勲章。

▶シェレーピン氏、労組中央委の議長も解任。

23日 ▶ソ連の軍事基地建設をリビア筋否定。

24日 ▶ソ連のリビアへの兵器供与、総額は120億ドルとカイロ紙報道。

▶ソ連、イスラエル大使、米で数回接触。

▶アムール川の“魚の王”調査——アムール下流の有名なカルーガは20歳まででに体長4m、体重1000kgになる。この魚はただアムール川だけにいる。

26日 ▶ソユーズ18号、サリュート4号とドッキングに成功。

27日 ▶中国、ソ連が南ベトナムの旧米軍基地の使用を要求したと指摘する。

▶サモトロール＝クイブイシェフ間石油パイプ・ラインのサモトロール付近完成。

30日 ▶ソ連の乗用車、米市場へ進出。

▶根強いブレジネフ書記長辞任説。

31日 ▶ソ連の西側へ輸出見込の石油、37億ドルか？

6月

1日 ▶プラウダ、シュレジンジャー長官の核報復の言明を厳しく非難。

▶核爆発利用で油田開発——ソ連紙モスコウスカヤ、プラウダが1日伝えたところによると、ソ連の科学者は二つの地下核実験を行ない、通常の方法では枯渇した油田からの石油採掘に成功した。

▶新華社、ソ連政権をヒトラーと同一視——新華社は1日「ブレジネフ集団はヒトラーの古い道を進んでいる」と題する論評を発表した。

2日 ▶ソ連首脳、佐藤元首相の死を損失と評価。

▶プラウダ、訪日中国報道代表団を再び非難。

▶鄧小平副首相、ソ連の攻撃は西欧にむけられると確信、と述べる。

▶ソ連漁業相来日。

▶KGB、はるかにCIAを越える——ニューヨークタイムスは、ソ連の秘密機関KGBは、現在42万人を数え、アメリカのCIAとFBIを合計した3万5500人をはるかに越えていると報道した。

▶バム鉄道地区の森林資源調査、ノボシビルスクの管

林関係者は今シーズンの間に約200万ヘクタールを調査する予定。

▶東独外相、訪ソ。

3日 ▶サケ、マス、日ソで共同増殖。

▶南ベトナム革命政府外相、ソ連外相と会談。

▶米ソ、核実験禁止で交渉再開。

▶コスイギン首相ロックフェラー銀行会長と会談。

4日 ▶ソ連最大のICBM、SS18発射実験。

▶コスイギン首相、ブルガリア首相と会談。

5日 ▶スエズ開通とソ連のインド洋戦略——ソ連は政治的、軍事的にスエズ運河の再開を強く歓迎している。ソ連のテレビは4日、再開を目前に控えた同運河のようを大々的に伝えたが、これは再開に寄せるソ連の期待の大きさを物語っている。ソ連はスエズ運河を東方への重要な出口とみて、重視しており、インド洋をめぐってソ連海軍の活動が活発化したのは68年以来であり、現在では約30隻の艦艇がインド洋に常駐している。

6日 ▶イシコフ漁業相首相を表敬訪問。

▶ソ連初の攻撃用空母「キエフ」就役準備にはいる—米誌ニューズ、ウィークによると、ソ連最初の攻撃用空母キエフ（3万5000トン）が、最近黒海沿岸のニコラエフ造船所からクリミア半島のセバストポリ軍港まで自力航行したという。キエフは垂直離陸機25機か、ヘリコプター36機を積むことができ、来年には就役する予定。

▶ソ連、ソマリアにミサイル施設。

▶ポノマリヨフ書記、クリシュナン印共書記長と会談。

7日 ▶日ソ漁業操業協定に調印、漁業被害賠償請求48年以降に適用。

8日 ▶操業協定交渉、日ソがコミュニケ。

▶イシコフ漁業相帰国。

▶ソ連、金星9号打上げ。

9日 ▶フォード大統領、SALT交渉進展すれば、プ書記長今秋に訪米と語る。

▶日ソ経済合同委員会、幹部会開催。

▶ソ連潜水艦、米海岸に接近——9日、米誌ニューズ・ウィークはソ連潜水艦が先週、米東海岸に接近して巡航したと報道した。同誌によるとこの潜水艦はこれまで米海岸から1600キロ以上離れた位置にいたが、今回はフィラデルフィアから800キロ以内、ノーホークから580キロ以内に接近している。またこの潜水艦は日常使用している武器は、2400キロの射程距離をもつミサイル16基を装備しているとみられ、国防総省筋は、米国の対潜水艦システムの反応をテストしていたのかもしれないと推測している。

10日 ▶訪ソを中止した金日成、東欧旅行。

▶ブレジネフ書記長1カ月ぶりに政務再開。

▶閣僚会議、第10次5カ年計画の骨子検討。

11日 ▶西シベリア油田の将来——プラウダ紙3頁論文『沿オビの資源を人民へ——サモトロールに次いで』によれば、西シベリア油田は、現在第9次5カ年計画において予定の年産1億2000万トン～1億3000万トンに代って1億4700万トンを国家に提供する。

▶サハロフ博士、心臓発作で倒れる。

▶緊張緩和の推進を強調、ソ連首相演説。

12日 ▶グロムイコ外相、重光駐ソ大使と会談。

13日 ▶ブレジネフ書記長、大量殺人兵器開発禁止協定を提案。

14日 ▶ソ連、金星10号打上げ。

15日 ▶訪米は全欧安全保障首脳会議後に。

▶ブレジネフ訪米は未定とキッシンジャー長官示唆。

▶第9次統一地方選挙実施。

17日 ▶赤城日ソ協会長、覇権問題の取扱い慎重にと申し入れ。

▶ソ連「覇権」で日本あての声明で日中条約慎重な態度を望む。

▶米ソ、気象兵器禁止交渉中。

18日 ▶ソ連艦隊基地、モザンビークにも？

▶政府、覇権に関するソ連声明に反論を訓令。

▶ソ連、ジュネーブでの中東和平会議断念か。

19日 ▶トウインダ＝コムソモリスク（バム鉄道）間新空路開設。

▶重光駐ソ大使、グロムイコ外相と会談。

20日 ▶ポノマリヨフ書記局員、シリア訪問。

▶モスクワ放送、日本の「核防」批准延期を非難。

▶ソ連、新MIRV50基配備。

21日 ▶ソ連が公海で日本漁船拿捕。

23日 ▶北極向け船団本年最初の出航。

▶中ソ代表が外交演説——国際婦人年世界会議。

▶ギレク・ポーランド統一労働者党第一書記は23日、モスクワ到着。

▶ベルギー国王、モスクワ入り。

▶ガスパイプライン用バルブ、ソ連から大量に受注。

24日 ▶ソ連覇権で再び警告。

▶コメコン第29回総会ブタペストで開催。

25日 ▶日中条約は軍事同盟的性格とソ連誌中国を非難。

▶駐タイソ連大使、東南アジア外交で演説——覇権を求めずと表明。

26日 ▶コメコン総会閉幕。

▶グロムイコ外相、訪伊。

27日 ▶プラウダ、インド首相ガンジー支持の論評。

28日 ▶東シベリアと極東の7月の気温予報——プラウダ紙、クラスノヤルスク地方南部、バイカル沿い、ザバイカル、またアソール州、ハバロフスク地方南部およびプリモリエ（沿海）では時々気温は25°～30°にあがる。しかし悪天候で短時間寒くなり夜間5°～10°、昼間15°～20°になることがある。

7月

1日 ▶社会党東京都本部訪ソ団に、モスクワ州委員会第一書記「日中共同声明」に関し不満を表明。

▶世界最大の核融合装置「トカマク10」実験的に始動。

3日 ▶ソ連海軍、日本海で大演習。

▶解放後のサイゴン、ソ連色強まる。

4日 ▶覇権で、日本世論は毛主義者に抵抗とプラウダ紙論評。

▶新しい原子力砕氷船《アルクチカ》号——世界最大の原子力砕氷船はいま北氷洋を東に航路をとっており、極北諸港向け貨物を積んだ船団を誘導している。

5日 ▶タス通信、仏内相発言に激しい非難論文。

6日 ▶バム建設へ米国からブルドーザー。

8日 ▶新造発電船チュメニ造船所からシュミット岬へ。

▶ソ連最高会議開幕——ソ連最高会議は（第9回招集第3会期）8日、民族会議と連邦会議を別個に開き、今会期の議題を、①鉱物資源の保護強化と利用改善のための手段の討議、②地床に関する連邦および共和国の基本立法原則（国土利用）草案の討議、③前会期以降に出された最高会議幹部会令の承認、などを決めた。つづいて民族、連邦両議会合同の会議が開かれ、議案の説明や討議にはいった。国土利用法案については、チーホノフ副首相が趣旨説明を行ない「ソ連共産党と政府は天然資源の合理的利用と自然保護の問題解決に絶えず努力してきた。今度の法案は国民経済の現在の発展状況に着眼して、準備されたものである。」と述べた。会議には党首脳もそろって出席したが、党中央委については、開催されたとの発表がなかった。

9日 ▶最高会議閉幕。

10日 ▶プラウダ、収穫作業急げと呼びかける。

11日 ▶米ソ外相会談終る。

▶ソ連、大量の金売却。

▶ソ連向け穀物輸出、最大限1000万トンと米農務長官語る。

12日 ▶タイ・ラオスを舞台にソ連、諜報活動強化。

14日 ▶澄田、アルヒーモフ、ヤクート天然ガス借款仮調印。

- ▶イズベスチア、中国よりの三木首相を批判。
- ▶全欧安保首脳会議、7月30日開催本決まり。
- 15日 ▶ソルジェニツィン氏、米議員に警告。
- 16日 ▶ソ連、自動車産業が急成長、乗用車の生産2割増。
- ▶日本海で日本の漁船、ソ連艦に拿捕か？
- 17日 ▶カナダもソ連に200万トンの穀類輸出。
- ▶米、ソ連にさらに120万トンの小麦売却。
- ▶ソ連、日本人の墓参り認める。
- ▶アポロ、ソユーズ、史上初のドッキング。
- ▶ブレジネフ書記長、ドッキング成功に祝辞。
- 18日 ▶ソ連の穀物被害、さらに深刻化。
- 19日 ▶ソ連の人口発表——ソ連政府中央統計局が19日発表したところによると、ソ連の7月1日付の総人口は2億5430万人となった。
- ▶エジプト、ソ連との友好条約破棄か？
- 20日 ▶中国、ソ連の宇宙開発を批判。
- 21日 ▶ソ連、宇宙協力の米管制官のイスに盗聴マイクをしかける。
- ▶ソ連、米からトウモロコシ、大麦も買う。
- ▶ソ連、シナイ協定交渉を非難。
- 22日 ▶ソ連当局、反体制歴史家アマリルクにモスクワ退去を命令。
- ▶ソ連、豪からも小麦輸入。
- 23日 ▶ソ連、ポルトガルに介入の疑い？
- ▶カナダ、ソ連漁船締出し。
- 24日 ▶ソ連、穀物大量買い手当てで、近く金大量売却か？
- ▶タイ人民の声、ソ連の進出非難。
- ▶サハリン大陸棚開発、借款協定に仮調印。
- ▶米国の対ソ小麦、船積み予定通り。
- 25日 ▶ソ連、穀物収穫見通し悪化、米農務省見解。
- ▶ソ連、覇権条項で中国に反論。
- ▶ソ連南部、旱魃のため農産物の打撃深刻。
- 27日 ▶社会党の科学技術視察団、ソ連へ出発。
- 29日 ▶台風調査船団太平洋で活動。
- 30日 ▶全欧安保会議、ヘルシンキで開幕。
- 31日 ▶全欧安保会議のブレジネフ演説、意外に平板。

8月

- 1日 ▶全欧安保協力会議最終文書に調印して閉幕。
- ▶全欧安保の最終文書案、ソ連、軍事演習等で譲歩。
- 2日 ▶パチンコ機、労働者の健全娯楽として、ソ連へ輸出か？
- ▶8月初の中央アジアの気象、中央アジア諸共和国では雲少く乾燥した天候、昼は35°~40°。カサフスタン北

部では秒速15~18mの風とともに短い雨と雷、昼は20°~25°。

- 5日 ▶ソビエト紙、中国のアジア政策を攻撃。
- ▶安倍農相モスクワへ。
- ▶北氷洋の氷状、20年来最悪。
- 6日 ▶西シベリア、チュメニ=スルグート間に新鉄道が開通。
- ▶プラウダ、「民主主義革命」に対して、プロレタリア独裁を強調。
- ▶黒沢明監督の映画「デルス・ウザーラ」覇権を正当化との中国批難にソ連応酬。
- ▶オビ川中流スウルグウトの鉄橋開通長さ2000m。
- ▶バム鉄道建設に社会主義諸国の学生協力隊参加、タイシエト=レナ複線工事には東独、ハンガリー、チェコ、ソ連邦の男女学生が働いている。
- 7日 ▶ソ連、社会党との関係改善に意欲。
- ▶日ソ農相会談、突然お流れ、ソ連農相不在で。
- 8 ▶米港湾労組委員長、対ソ穀物船積み停止指令。
- ▶イズベスチア、日米会談を緊張緩和に逆行と批判。
- 9日 ▶ソ連の総兵力は400万人以上と米統合参謀本部議長語る。
- ▶プラウダ、アジア集団安保創設の条件整うと報道。
- 10日 ▶ブレジネフ、チェコのアムステルダムと会談。
- 11日 ▶コスイギン首相、ワルシャワ入り。
- ▶ブレジネフ・フサーク会談。
- 13日 ▶ソ連農相、更迭か？
- ▶エニセイ川ドウディンカ港、今年100万トンの貨物量。
- 14日 ▶キッシンジャー長官、ポルトガル問題で、ソ連に警告。
- 17日 ▶ソ連、米国からの穀物輸入、1100万トン追加か。
- 18日 ▶ソ連穀物、頼みの東部でも不作をイズベスチヤ紙報道。
- 19日 ▶豪、小麦25万トンソ連に追加売却。
- 20日 ▶アルタイ地方の穀物刈取り状況、アルタイの農場480万haから穀物を刈取るため、コンバイン2万5000台、刈取機1万3000台、自働車4万6000台が出動した。
- 21日 ▶ソ連、海軍力を増強し、政治的優位をねらうとジェーン海軍年鑑が指摘。具体的海軍力は以下の通り。原潜120隻、通常型191隻、その他原潜19隻、通常型77隻が建造中か予備役。空母(小型)3隻(2隻はヘリ空母)、建造中1隻、巡洋艦33隻、駆逐艦106隻、フリゲート艦109隻。
- ▶米農務長官、ソ連に更に800万トンの追加輸出可能と語る。

▶タス通信、ジェーン年鑑を非難。

▶ソ連・チェコ経済調整議定書調印。

22日 ▶中ソが大量の金を売却。

27日 ▶バム鉄道建設の学生国際協力隊献送式。本日学生建設隊《ドルッジバ》を送るミーティングが催されブルガリア、ハンガリア、東独、北ベトナム、キューバ、モンゴル、ポーランド、ソ連、チェコ9カ国男女学生300名が学生建設隊に加わった。北朝鮮は参加していない。

▶ソ連、アジア安保構想呼びかけ、北方領土は現状固定の方針。

30日 ▶プラウダ、中東での「米軍監視員」を批難。

9月

1日 ▶サハリン大陸棚開発交渉難航、調査船の国籍をソ連に移管せよとソ連側要求。

3日 ▶ロンドン着陸直前、ソ連機内で殺人事件発生、乗員真相を話さず、捜査難航。

4日 ▶上半期、対西側貿易収支、13億ドルの赤字。

6日 ▶米ソ、新漁業協定合意。

8日 ▶青森の漁船、ソ連船に銃撃さる。

10日 ▶イズベスチヤ紙、中国の軍事大国路線批判。

▶沿海地方の朝鮮人蔘絶滅の危機。

11日 ▶農業収穫状況（9月8日現在）——プラウダ紙、中央統計局の資料によると、9月8日迄にソ連全土で9300万 ha（全播種面積の75%）を刈取り8670万 haから脱穀した。ロシア共和国では5720万 ha（75%）を刈取った。作業の重点はシベリアで、1020万 ha（60%）刈取り。アルタイ地方340万8000 ha（72%）。ノボシビルスク、チュメニ州、クラスノヤルスク地方においては45～62%刈取り。プラウダ紙はオムスク、チタ州の脱穀の遅れを認めている。そこではまだ多くが畑に積んである。

15日 ▶反体制作家アマリルク氏、ソ連の市民権は捨てないとフィガロ紙記者に語る。

▶米記者へ数次出入国ビザ発給で好意的回答。

16日 ▶ヤクートのジャガイモ——ヤクート自治共和国では、ヘクタール当たり平均15～16トンを取入れた。

17日 ▶日ソ専門家会議でソ連大型船、伊豆沖、北海道沖操業を自粛か？

▶帰任のトロヤノフスキー大使、宮沢外相と会談。

18日 ▶平沢和重氏、米外交専門誌「フォーリン・アフェアーズ」に二島返還で日ソ平和条約を寄稿。

▶外務省、平沢論文に不快の表情、対ソ交渉への影響憂慮。

▶グロムイコ、米首脳と会談。

19日 ▶平沢構想の否定、閣議で確定

▶自民党内、平沢論文で三木首相へ反撥。

▶三木首相、平沢論文は平沢個人の見解と釈明。

▶宮沢外相、四島一括返還の要求不変と強調。

▶日共の不破書記長、平沢論文を現実的と高く評価する旨、院内の記者会見で述べる。

▶キッシンジャー、ソ連の石油開発援助を示唆。

25日 ▶ソ連 TU 95ベア型爆撃機2機、伊豆七島上空の領空を侵犯、外務省抗議。

▶日共、平沢論文を現実的と評価したことで弁明。

26日 ▶反体制ジャーナリスト、ウラジミール・オシポフ、重労働8年の刑に処せらる。

▶ブレジネフ、来年2月の党大会で辞任と伊紙報ず。

27日 ▶アルゼンチンと小麦、大豆の輸入商談中。

▶コムソモリスクのアムール川鉄橋完成、ブレジネフ書記長祝電。

28日 ▶西独紙、ソ連戦略の第一目標はスペインと報ず。

▶色丹、国後島を観光地化。

▶9月下旬～10月上旬極東シベリアの気象——西シベリア南部州気温急変、夜零下～+6°、昼+5°～+11°～16°迄、バイカル湖付近、ザバイカル、稀に雨と雪、昼+5°～10°から零下まで。夜は寒く、-10°～15°まで下る。東シベリアと極東の北部地区では本格的な冬をむかえ、夜は-30°～35°、ところにより-40°に下る。

30日 ▶国慶節に最高会議、閣僚会議から祝電、党からの祝電なし。

▶英国のソ連研究家マッキントッシュ、ソ連は毛沢東以後に関係改善を考慮と語る。

10月

1日 ▶ポルトガルのゴメス大統領、モスクワ訪問。

▶カートシェフ書記、ルーマニア訪問。

2日 ▶米ソ科学技術協力委、第4回定例総会。

3日 ▶グロムイコ外相、「日本の北方領土返還要求根拠なし」とコムニスト誌に論文発表。

▶コスイギン首相、伊貿易相と会見。

4日 ▶バム鉄道建設基地セベロ・バイカルスクの人口2000人。

5日 ▶穀物生産、10年来の最低。

6日 ▶東独の党政府代表団訪ソ。

7日 ▶ソ連・東独間新友好条約、対中軍事同盟か。

▶科学アカデミー創立250周年。

▶ソ連、ブルガリア、5カ年計画調整議定書調印。

8日 ▶外務省、グロムイコ論文でソ連大使に注意喚起。

9日 ▶欧州共産党大会準備会議、ベルリンにて開催。

▶アサド・シリア大統領、訪ソ。

10日 ▶タス通信、サハロフ博士を非愛国者と非難。

11日 ▶米ソ穀物交渉、中休み。

▶クラコフ書記、ブルガリア訪問。

▶ポリヤンスキー農相、不作を確認。

▶サハロフ博士のノーベル平和賞受賞について米國政府沈黙。

12日 ▶サヤノ・シュシェンスカヤ水力発電所工事、エニセイ河の閉塞完了。

13日 ▶ソ連・東独コミュニケ、中国非難。

▶閣僚会議、第10次5カ年計画を討議。

▶工業偏重のため、農村青年離村、農業荒廢の傾向。

▶第73回コメコン理事会開催(モスクワ)。

14日 ▶仏大統領に息子の釈放を反体制学者の母親訴える。

▶仏大統領、モスクワ訪問。

15日 ▶グロムイコ(北方領土)論文は覇権主義と新華社報道。

▶作家同盟機関紙、サハロフ授賞を冷笑。

17日 ▶仏ソ首脳会談終わる。

▶バム鉄道に使用する機関車——バム鉄道ではディーゼル機関車を使用するものと考えられているが、そのため2万馬力の牽引力の機関車がつくられる。しかし、それでも難所では所定の速度をだすことができない。そこで3000馬力の《TE=116》ディーゼル機関車を7両つなげなければならないと思われる。また1万~1万2000馬力のガスタービン機関車の製作が計画されている。これならば2輛つなげればよい。

18日 ▶ソ連精神病院の約1割が政治的患者であると亡命作家証言。

19日 ▶ナホトカ港の発展——毎年1000万トン以内の内陸貨物を取扱い、25カ国の商船が来ている。定期航路は日本、アメリカ、印度その他の国々を結んでいる。

20日 ▶サハロフ氏、出国許可申請。

▶米國より小麦120万トン追加輸入。

▶デンマーク紙、サハロフ氏近く国外追放かと報道。

▶米ソ穀物協定調印、今後5年間、毎年600万トンの穀類購入の約束。

▶米ソ石油貸付協定に関する米國の意図公表。

21日 ▶サハリガス石油探鉱プロジェクトに対する日ソ・ローン協定調印。

▶ソ連の今年度穀物輸入総量2300万トンと米農務次官言明。

22日 ▶プラウダ紙、キッシンジャーの北京訪問を警戒。

▶日ソ漁業操業協定成立。

▶プラウダ紙、國境河川合同委を中国がひきのばしていると非難。

24日 ▶3隻目の空母(約4万トン)を偵察衛星でキャ

ッチ。

▶日ソ漁業操業協定発効。

▶新造砕氷船《アドミラル・マカロフ号》——フィンランドで建造した砕氷船《アドミラル、マカロフ》号は比較的短期間に北氷洋を通過してウラジオの金角湾に入った。この砕氷船は4万1400馬力の世界でも最も強力なディーゼル電力砕氷船の一つで、速力20ノット以上。

25日 ▶北海道漁連、効力のない漁業協定に抗議。

▶エウエンキー民族管区のトナカイ総数は現在4万6000頭。

27日 ▶砂糖買付けの噂を食糧輸入公団否定。

▶本年のエニセイ河航行完了。

28日 ▶ブレジネフ書記長、訪米無期延期か。

▶酔っぱらい追放運動再びはじまる。

▶ソ連・北ベトナム会談、クレムリンで始まる。

29日 ▶サハリン最北モスカリボ港本年の最終作業。

30日 ▶北越・ソ連首相、共同宣言に署名。

31日 ▶プラウダ紙、第一面全面に北ベトナムとの友好を強調。

11月

4日 ▶米シュレジンジャー国防長官の解任、ソ連は歓迎、中国は憂慮。

▶ハバロフスク地方の大豆収穫4万4000トン。

▶ソ連、ブルガリア、東独3国貿易省会議。

5日 ▶小麦、ブリヤート自治共和国20万2000トン、チタ州40万3000トンの収穫。

6日 ▶革命58周年記念日夜夜集会クレムリンでひらかれ、ペリシエ政治局員演説。

▶第9次5カ年計画、農業は失敗、工業は辛うじて目標達成。

▶タス通信、サダト・エジプト大統領の訪米を冷笑。

7日 ▶革命記念パレード。

8日 ▶外国貿易次官、悪天候のため畜産に打撃と述べる。

10日 ▶森林開発用アシノ＝ベールイ・ヤル鉄道182km開通。この付近は夏季30°、冬季マイナス50°の気温。

11日 ▶鄧小平副首相、ビルマ大統領歓迎の席でソ連のアジア進出非難。

▶アンゴラ人民共和国(MPLA)承認。

12日 ▶サハロフ氏への出入国ビザ発給拒否、亡命を恐れて。

▶作家マクシモフの市民権剥奪。

16日 ▶来春の党大会指導部の対立激化のため延期か。

17日 ▶国際アムネスティ、ソ連に1万人の政治犯と報告。

- ▶三菱重工に原子炉輸入希望。
- 18日 ▶イタリア大統領、訪ソ。
- 19日 ▶ポドゴルヌイ、ユーゴ議会代表団と会見。
- 23日 ▶誤案に飢えるモスクワ市民、レストランにも容易に入れず。
- ▶サマルカンドに降雪。
- 25日 ▶科学アカデミー総裁にアレクサンドロフ選出任命。
- 26日 ▶プラウダ紙、日中条約の覇権、いかなる形でも反対と論評。
- 27日 ▶サハロフ博士、日本人記者団と会談、各共和国はモスクワ離れがおこりつつあると語る。
- ▶アムールの支流、ゼーヤ河水力発電所、第一発電機(21万5000kW) 始動準備完了。
- 29日 ▶ソ連監視船、故意に日本漁船に体当たり沈没させ、乗組員3人を殺害。
- ▶ソ連・チェコ共同声明、中国を非難。
- ▶外務省、漁船員死亡事故の詳細説明をソ連に要求。
- 30日 ▶コメコン貿易支払交渉難航、ソ連の独善に反撥。

12月

- 1日 ▶党中央委総会開かる——最高会議に先だって党中央委総会が開かれた。そして、76年の経済計画と予算について討議、採択したあと、76年2月末にひらかれる予定の第25回党大会の議事日程を議決した。
- ▶クリバック級、ソ連駆逐艦、はじめて日本海へ登場。
- ▶サハロフの代理人コバレフ、反ソ宣伝の科で、裁判にかけらる。
- 2日 ▶最高会議開幕——第9次ソ連最高会議第4会期がモスクワのクレムリン宮殿で開かれ、パイバコフ副首相兼国家計画委員会議長が1976年度国民経済発展計画案について報告し、ついで、ガルブゾフ蔵相が1976年度国家予算について報告した。それによると、1976年度の工業生産の増加率を4.3%に見こんでいる。
- ▶ソ連大型漁船、釧路沖でまたも無謀操業、日本漁船8隻、網を破らる。
- 4日 ▶最高会議、幕を閉じる。
- ▶ヤクート天然ガス融資、来年3月末まで有効期限延長。
- ▶「極東の諸問題」誌、日中友好条約交渉で日本非難。
- 5日 ▶ソ連当局、米中首脳秘密会談かと懸念。
- ▶自動車泥棒、モスクワで横行。
- ▶カムチャツカ半島にABM用レーダー基地建設か？
- ▶米ソ海運交渉決裂。
- 6日 ▶ソ連農業は破産と新華社論評。
- ▶ベイルートの誘かい合戦、ソ連外交官まきぞえ。

- 8日 ▶80年代初期の原子力発電所計画900万kWの予定と電化省筋語る。
- ▶ブレジネフ書記長、西独社民党機関紙に寄稿、両国の平和共存強調。
- ▶新油田の開発停滞、技術低劣と石油相、石油産業を叱る。
- ▶キッシンジャー、訪ソ延期。
- ▶反体制活動家59人、全面的政治恩赦よびかけ。
- ▶ブレジネフ、ポーランドで演説。
- 10日 ▶サハロフ夫人、代理でノーベル平和賞受賞。
- 11日 ▶鉄鋼生産1億1700万トン(1~10月)に達す。
- 12日 ▶NATO 外相事理会、米核兵器とソ連戦車部隊の相互撤収案を承認。
- 13日 ▶第9次5カ年計画の達成状況発表。
- ▶74年版日本年鑑刊行。
- ▶ノリリスク=ドウジンカ鉄道電化、ソ連最北。
- ▶第10次5カ年計画草案発表さる——1976年から80年までを区切る第10次5カ年計画の草案が13日発表された。これはすでに12月初めの党中央委総会において承認済みのものである。1980年までの主な工業達成目標は、石油6億2000~4000万トン、鉄鋼1億6000~7000万トン、自動車210万~222万台(トラック、トラクターを含む)などがあげられる。
- ▶シュレジンジャー前国防長官、このままではソ連が戦略優位に立つと警告。
- 15日 ▶イズベスチヤ紙、新太平洋ドクトリン非難、米中国関係強化を懸念。
- 16日 ▶米大統領、ソ連のアンゴラ介入に懸念表明。
- ▶ソ連漁船の不法操業に抗議。
- 18日 ▶米ソ穀物運賃協定調印。
- 19日 ▶宮沢外相西ドイツで、ソ連のアジア安保構想受入れられずと説明。
- 22日 ▶ラムズフェルド国防長官、ソ連にSALT違反の証拠なしと言明。
- 25日 ▶チュメニ産油量1億3600万トンに達す。
- 26日 ▶米国内でのKGB(ソ連秘密警察)の活動に関する資料、ロックフェラー委員会削除。
- ▶ロールス・ロイス、航空エンジン技術でソ連と協定。
- 27日 ▶ソ連、細菌戦争の研究続行とワシントン・ポスト紙暴露。
- ▶中国、ソ連ヘリコプター乗員釈放。
- ▶政府、漁船員殺害でソ連へ強硬抗議。
- 29日 ▶コスイギン首相、トルコ訪問終る。
- ▶ソ連、トルコ共同コミュニケ発表。